らい閉じて、すぅすぅと寝始めた。辺りに散らばるゴミはそのままで。片付ける気にもならず俺も食べるのをやめて仰向けに寝転がる。

「――なぁ小僧。幸せって何？」

「自分の満足度」

「だったら今幸せなのか？」

「腹は幸せだ。おまえは？」

「不幸せ。肉が食いてぇ」

「中に非常食ぐらいあるだろう」

山本は後でいいや、とまた目を閉じた。行き先がない逃避行中は、緊張と弛緩が交互に訪れて神経が休まる暇がない。まだ二人なだけ、それも互いが俺達でまだマシなんだ。どちらかが俺達じゃなかったら、ここまで俺はもっていないような気がする。山本の状況判断力、戦力、体力、そして物事を深く考えすぎないところが俺を気楽にさせる。山本のしたいようにさせて、俺も食べるのをやめた。

「ツナは――ずっとこんなプレッシャーの中にいたんだな」

山本はぼんやりと呟く。

「止めておけ。考えても無駄だ。おまえはツナじゃないし、ツナもおまえじゃない」

つい、腕を伸ばして、まとまらない髪をくしゃりとかきまぜる。

「小僧は、俺を甘やかし過ぎると思う」

「甘えられるときに甘えとけ」

深刻な顔をしていたくせに、子供扱いに甘んじる武は実に扱いやすい。ようにしてくれている。こうやって、俺達はいつのまにか相手の楽になるように演じるのが常になっていた。山本の炎が甘美な余韻を持つように、こいつの本質は快楽だ。だけれどもそれを蒼燕流の継承者としての矜持が覆って隠している。今は敢えてそれを剥がさない。ほっといていても、いつかは滲み出してくるものだ。

わしゃわしゃとかき混ぜている間に、山本は本気で寝入ったようだ。寝息と風音をBGMにしていると、まさに生きていることを実感する。

次第に日は落ちて、俺達は夕闇に溶けていく。ゆっくりとゆっくりと地球が回転する角度で夜のしじまが降り、夜行性動物が起き始める時間が訪れても、このコテージに訪れる勇敢な動物はいなかった。果物と動物の芳香が充満しているというのに。俺達の方がよっぽど獣で、敵わないことを闇越しにわかっているのだろう。

とん、と太郎が戻ってきた。思い存分走り回ったようで、炎の揺らぎは薄い。

「おまえに（俺の炎は）食わせるわけにはいかねーが」

ベッドの端から指を伸ばすと、グルと喉を鳴らして指先に濡れた鼻先を押しつけてきた。小次郎も近くの木の枝に蒼い炎をゆらめかせていた。

「後を頼むな」

山と海に囲まれたコテージはまさに隠れ家のようで、葉の間から覗く漆黒の空には星が溢れていて。まるで満天の星空に抱かれているような浮遊感の中、俺はゆっくりと眠りについた。

夢を見た。

まだ小さな、自分の名前を言えるようになったくらいの小さなツナ達がいた。彼らは甲高い声ではしゃいでいた。山本もいた。獄寺も、了平も雲雀すらいた。小さな彼らはまだ将来どころか自分が何者かも知らずに心から自由だった。四方八方に走り回る彼らを銃でもって脅したって水鉄砲と思われるのがオチだった。かたっぱしから集めて腕の中におしこめる。暴れるからうぜぇと抱きしめる。

その自分の声で目が覚めた。実際に、抱きしめた物が暴れるから夢から覚めたとわかっていながらぎゅっと抱きしめる。と、濡れた柔らかいものがおしつけられた。太郎かと思っていたら山本がボナセーラと寝ぼけ眼で頬をすりつけてきた。

途端に離れたところに投げ飛ばした。

「ひでぇ…」

もぞもぞと言いながら山本はシーツに隠れる。

辺りは朝の瑞々しい気配に満ち溢れていた。いつ山本を抱き始めたのかわからないが、それはファミリーのあたたかさにも似ていて、ひどく安心した。だからあんな夢を見たのだろう。実際に抱きしめることなんて出来やしない。抱いた端から零れていく。それに俺の腕じゃ奴らではせいぜい一人が関の山だ。

「悪かったな」

シーツ越しの山本に声をかけると、気にするなという風に掌がひらひらと揺らされた。その山本に背中だけ預けて寝ころぶ。

その体温を欲したのか、睡眠を欲しているのか自分でもわからない。

太陽が顔を出すまであと少し。

それまではこのまま寝ていたって文句は言われないだろう。

眠る太郎の首の辺りを撫でると薄目を開けるから、その首を抱き込む。ちくちくした毛並みが本当の犬みたいで、さっき抱き込んだ武の頭みたいで、そっと笑った。